タイ人日本語学習者の発話に見られる標識

水野吉徳

1. はじめに

「日本語教育の目的が、日本語を外国人の話し手に使わせることにあるのなら、外国人の話し手が実際に日本語をどのように使っているかを研究してみる価値があるはずである。(ネウストプニー(1995):186)」。有益なデータとしてのコーパスの重要性については土岐他(2009)で述べられている。本稿ではACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Language)によって作成されたOPI(Oral Proficiency Interview)の手法で集めたデータを初級、中級、上級話者に分け、発話内に多く見られる表現を形態素分析ソフトで割り出し、そのレベルの標識とすることによりタイ人日本語学習者(以下、学習者)発話のレベルが査定できることを提案する。

2. OPIの各レベル

OPIは大枠では初級、中級、上級、超級の4つがあり、超級以外は下位レベルとして－下、－中、－上の3つを設けている。つまり10段階に分かれる。判定基準は下表1を見られたい。30分以内のインタビューで場面・話題に合わせて目標言語をいかに話せるかを測定する。テキストの型というのは発話の長さを示す。なお、上のレベルは下のレベルのタスクがすべてできなければならず、できない場合、下のレベルの-上となる。

表1. OPIの判定基準の一部(牧野他2001:18)

	機能・タスク	場面／話題	テキストの型
上級	詳しい説明・叙述ができる。予期していなかった複雑な状況に対応できる。	インフォーマルな状況で具体的な話題がこなせる。フォーマルな状況で話せることもある。	段落
中級	意味のある陳述・質問内容を、模倣ではなくて創造できる。サバイバルのタスクを遂行できるが、会話の主導権をとることができない。	日常的な場面で身近な日常的な話題が話せる。	文
初級	機能的な能力がない。暗記した語句を使って、最低の伝達などの極めて限られた内容が話せる。	非常に身近な場面において挨拶を行う。	語・句

3. 分析方法と分析結果

筆者が行ったOPIにより学習者30名、内訳、初級-上の10名、中級-中の10名、上級-下、中の10名の発話データを準備した[1]。30名全てが日本語科の学生か大学院生である。上級の10名は全員渡日経験者である[2]。30名のデータをKH Coder[3]にかけ、分類できないものは検索機能を使って分析した。

表2. 各レベルの総抽出語数と異なり語数

	初級ー上	中級ー中	上級ー下、中
総抽出語数	12.931	17.564	22.640
異なり語数	1.014	1.286	1.709

上表2は各レベルの発話語数を示したものである。記号もカウントされているため実際の発話語数より多いが、上のレベルにしたがって発話量が増えているのがわかる。後節では形態素に分けたデータを検討する。

3.1 各レベルと形態素

各レベルごとの形態素を見ていく。各レベルにはそのレベルに多く見られる形態が存在する。まず、否定の助動詞「ん」、「ない」では初級では「(ませ)ん」が76回、「ない」が30回で、「ん」が2.5倍にのぼるが、中級になると「ん(92回)」、「ない(117回)」で逆転している。さらに、上級では「ない(237回)」が「ん(42回)」を圧倒している。この変化は負の相関(R=-0.73)が見られた。これは発話レベルが上がるごとに母語話者の発話に近づいているからであろう。母語話者の「ん」と「ない」の使用を明らかにした小林(2005)、川口(2010)では、母語話者は「ん」より「ない」を好んで使用することが報告されている。

表3. 各レベルの否定助動詞と「その」と接続詞の出現数(回)

	ん	ない	その(連体)	その(ﾌｨﾗｰ)	それから	で
初級ー上	76	30	2	0	44	3
中級ー中	92	117	41	4	26	4
上級	42	237	73	4	7	67

次に、連体詞「その」とフィラーの「その」を見てみる。山内(2009)では、「あの(ー)(以下、あの)」が中級の標識[4]であることが報告されているが、上の表を見る限りでは、連体詞「あの」は見つからなかった。山内(2009)はフィラー(または、感動詞)の「あの」をカウントしている可

能性がある。一方、連体詞「その」では中級から多く出現しているため、「その」は中級話者の標識と考えてもよかろう。

接続詞「それから」、「で」では発話レベルが上がるごとに「それから」が使われなくなり、「で」が上級(67 回)で急増している。「それから」→「で」のシフトがあることが予想され、負の相関(R=-0.88)が見られた。

表4では、使役形・受身形は徐々に数を伸ばしているが顕著な伸びが見られない。しかしながら、意向形では上級(163 回)で大幅に使用数が増えている。安定して意向形が出現していれば上級話者であるといえる。次に、「もう一度」という表現を見てみる。この表現は「もう一度(お願いします)」という聞き返しに使われる表現である。全体数が少ないが、上級では使用されていないのが注目される。日本語テキストの定番表現が上級に進むにつれ他の表現に変わったといえるであろう。

補助動詞「～ている」「～てる」はどうであろうか。「～てる」は「～ている」の「い」が省略されたものである。初級、中級ではほとんど出現していないが、上級の発話には爆発的に増えている。ただし、上級の「～ている」もまた「～てる」以上の数にのぼる。つまり、併用されているのである。高い正の相関(R=0.98)が見られた。

表4. 各レベルの使役形・受身形と意向形と「もう一度」と補助動詞の出現数(回)

	使役形	受身形	意向形	「もう一度」	～ている	～てる
初級一上	1	3	9	14	37	2
中級一中	2	27	39	7	56	2
上級	7	33	163	0	139	83

次表5は感動詞類である。フィラー、または不整表現(伊佐早 1953)、言い淀み系(田窪・金水 1997)とも呼ばれる。また、談話標識[5]としてみるむきもある。この表でも発話レベルが上がるにつれて出現率が上がっている。

表5. 各レベルの感動詞類の出現数(回)

	あの(ー)	え(ー)と	そうですね	なんか	ま(ー)
初級一上	21	71	0	0	0
中級一中	76	66	1	2	0
上級	546	128	86	117	26

山内(2005, 2009)では「あの」は連体詞と同様に感動詞「あの」も中級の標識であるとしている

が、タイ人学習者には当てはまらないようである。爆発的に増えているのは上級(546 回)に入ってからである。「え(ー)と(以下、えと)」は初級から出現しているが、表 6 の上段N-3(初級-3)が突出して使用しているためかなりの数にのぼった。「ま(ー)(以下、ま)」、「なんか」、「そうですね」は上級から出現しているため上級の標識としてもいいようである。「そうですね」は日本語初級教科書には必ずある定番表現であるが、初級、中級では使われていない。これは面白い現象であるが、上級の発話には詳しい説明や描写、叙述が求められるため、出現したと思われる。上級から「そうですね」が出現するのは、「そうですね」は「単に質問に答えるという場合には使えず、自分の意見をまとめて述べるときに使う(小林 2005 : 28)」からであろう。

表 6. 各レベルの「あの(ー)」「え(ー)と」の出現数(回)

	N-1	N-2	N-3	N-4	N-5	N-6	N-7	N-8	N-9	N-10
あの	3	3	3	8	0	3	1	0	0	0
えと	0	0	65	0	0	0	0	1	0	5
	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	I-8	I-9	I-10
あの	30	0	0	1	0	14	3	28	0	0
えと	0	0	2	30	4	0	30	0	0	0
	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8	A-9	A-10
あの	52	5	29	30	143	1	25	112	147	2
えと	0	0	0	2	0	87	22	8	0	9
なんか	0	0	16	27	15	30	2	25	2	0
ま	0	0	2	0	0	0	0	13	8	3

学習者は「あの(ー)」や「えと」[6]を談話標識として使用しているのだろうか。或いはつめ草言葉として使っているのだろうか。上表 6 は上段が初級話者(N)10 名で、中段が中級-中話者(I)10 名、そして、下段が上級話者(A)10 名である。「あの」が出現した話者には「えと」がほとんどあらわれず、その反対に「えと」が出現した話者にはほとんど「あの」が使われていない。つまり、「あの」か「えと」のどちらかに偏った出現の仕方をしているのである。これは談話の標識としての使用というよりも、つめ草的なフィラーと見なせるであろう。下の発話(1)は初級話者の発話であるが、いささか不自然に聞こえる。母語話者ならここでは「あの」を選ぶであろう。

(1)えーと、もう一度お願いします。(N-8)

一方、上級の発話に見られる「なんか」の出現は「あの」「えと」に関係ないようである。「な

んか」は先行研究の知見によると、発話命題のあいまい性、または情報計算処理のあいまい性を表示している(川上 1992、エメット 2001)マーカーである。上級で現れるのは、想定される聞き手の知識も加味して処理できるようになるからであろう。語用論的にいうと聞き手との知識差の開きを避けたい話者の心理が働き「なんか」[7]を使用させるのである。「ま」は上級の 10 名中 4 名から出現している。「ま」[8]は発話命題に対する想定を調整している標識であると思われるが、その想定を目標言語である日本語で活性化しなければならない。それができるのは上級以上であろう。

下表 7 で助詞類を見る。まず、接続助詞の「し」では上級で二桁(19 回)に伸びている。これが出現すれば上級ということだろう。「けど」は中級(10 回)になって使われ始め、上級(81 回)になって安定した使用となっているのがわかる。

表 7. 各レベルの助詞類の出現数(回)

	し	けど	や	とか	という	ていう	よ	な
初級ー上	3	0	12	0	4	0	0	0
中級ー中	1	10	15	29	19	2	8	3
上級	19	81	3	69	28	23	18	62

次に、並列助詞はどうであろうか。「や」はレベルが上がるほど使用が減っている(12→15→3)。中級でわずかに増えているのは発話量そのものが増えたためだと思われる。他方、「とか」は中級(29 回)に出現し、上級(69 回)で安定している。中級でシフトしたと考えられる。「や→とか」シフトと同じように「という」から「ていう」も上級でシフトしている。ただし、「という」は減ることはなく、「ていう」と平行している。

表 8. 上級話者の「という」と「ていう」の出現数(回)

	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8	A-9	A-10
という	5	3	3	1	6	3	2	3	2	0
ていう	0	0	0	0	0	0	7	6	10	0

上の表を見ると、A－7,8,9 が「ていう」の使用者であるが、出現回数が「という」よりも若干多い。シフトの順序として「という」→「という／ていう」→「ていう」であることが示唆される。

最後に、終助詞「よ」と「な」を見たい。表から「よ」と「な」が出れば中級以上であるのがわかる[9]。「よ」は「その文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表す(野田

2002)。」センテンス以上の発話で自分の言いたいことが言える段階である中級以上ということなろう。「な」は「ね」と同様、何かとの一致を示しながら述べる(野田 2002：283)表現で、話し手限りの発話であることを示す(森山 1989：102)。「な」は聞き手がいない場合でも使用でき、聞き手がいる場合、間接的な表現となる。下の(2)では日本人にタイ文化を伝えるにはタイ料理がいいということを思考動詞「思う」を使わず、「な」を使って表している。述べ立文のスピーチレベルに擬似的な独話、つまり、表出文を差し挟むことによって思考動詞と同じ発話効果を上げている。

(2)<日本人にタイ文化を伝えるにはどんなことをするか>

A-5：んー、そうですね。まず、あの、タイ料理かな。あの、日本人がタイ料理に興味があるようですね。多分、あの、その、このところから始めたらいいかな

初級、中級ではスピーチレベルシフトができないが、上級ではできるといえよう。上級では話題や場面によって話し方が変えることができる。スピーチレベル・シフトもそのひとつであるため、「な」または「かな」が出現すれば、上級であるという傍証となる。

表 9.「な」と「かな」(回)

な	18
かな	44
合計	62

「な」は 62 回出現しているが、そのうち 44 回が「かな」の形式である。「かな」は不確定要素の表出であるが、「な」のみの使用の 2 倍強であることから、「な」の使用は「かな」が動機付けられていると考えられる。

さて、最後であるが、思考動詞「思う」を見てみる。「思っていま」と「思って」を検索した結果が下表 10 である。「思いま」はマス形式で、「思って」はテイル形式及び動詞(連用)接続を表している。文レベルの発話ができるようになる中級から「思いま」が増え始め(28 回)、そして、まとまった意見を言うことができる上級では安定して出現している。

表 10. 各レベルの「思いま」と「思って」、「思う」の出現数(回)

	初級一上	中級一中	上級
思いま	7	28	92
思って	1	1	34
思う	0	1	7

一方、「思って」は上級(34 回)から急増しているのがわかる。「思って」の内訳が下表 11 である。動詞接続(16 回)、テイル形(18 回)とほぼ同数出現している[10]。

表 11.「思って」の内訳(回)

思って、	16
思ってい	18
合計	34

「思って、」には問題が少ないと思われるが、「思っている」には誤用が多いようである[11]。(3)では「思います」と「思っています」両方が出現している。A－10 なりの使い分けがあるのかもしれないが、ここでの「思っています」は誤用とみなせるであろう。しかしながら、「思ってい」は数の上からいって上級の標識としては有効に思われる。

(3)<外国人の拝観料について>

A-10：うん、でも、50 バーツは、私、ちょうどいいと思います。もし 500 バーツだったら、私、高すぎと思っています

ちなみに、思考動詞「考える」は中級(6 回)、上級(7 回)で、少なく、自分の意見等を表すには「思う」の方を選ぶようである。以上、各レベルの発話に見られる形態素を見た。

3.2 まとめ

文法や漢字の学習と違い、「話」の試験は施行する側の主観性や恣意性が多分に入る。本稿での提案は、「話す」技術の査定を学習者が話したデータから抽出した標識を使うことにより主観性や恣意性を排除できるのではないかというものである。水野(2009)では、タイ人初中級者に多く見られる誤用「N_2のN_1」は上級話者にこの誤用が見られないことから、「N_2のN_1」の誤用は中級話者以下の誤用で、そこのことが上級話者ではないことを表していると述べている。

初級から上級を眺めてみると 3 つの動きがうかがえる。第 1 に、ある形態素がレベルとともに徐々に増えていくもの。第 2 に、ある形態素から違う形態素にシフトしていくもの。第 3 に、あるレベルで爆発的に出現が見られるもの。下に主なものを挙げておいた。

(4)中級レベルの標識

連体詞「その」
受身形
意向形
接続助詞「けど」「とか」
助詞相当「という」
終助詞「よ」
「N_2のN_1」の誤用(水野 2009)

(5)上級レベルの標識

接続詞「で」

「もう一度」の非使用

補助動詞「～てる」

感動詞「そうですね」「なんか」「ま(ー)」

助詞相当「ていう」

終助詞「な」

「思って」

4. おわりに

OPI の手法で分けた各レベルの学習者の発話データを利用して、全発話を形態素等に分け、そのレベルで特徴的な表現をそのレベルにおける標識とすることを提案した。もしそれが妥当であるなら、その標識を使って査定したデータもまたデータバンクに入れられるものとなる。それを繰り返せば、そのデータの信頼性、妥当性も上がることになる。ただし、各レベルの標識は印であって、そのものではないことに注意しておかなければならない。心理学が間接的に脳の動きを見るように、各レベルの標識もまた間接的であるといえる。各レベルの標識はそれ自体で成立するものではなく、言語形式の構造の一部を担っていると考えた方がよいであろう。

注

(1) 上級で A-8 が上-中で、それ以外は上-下である。

	N-1	N-2	N-3	N-4	N-5	N-6	N-7	N-8	N-9	N-10
初-上	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	I-8	I-9	I-10
中-中	女性	男性	男性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8	A-9	A-10
上級	男性	女性	女性	女性	女性	男性	女性	女性	女性	男性

(2) 最短の旅行で 2 週間の学習者から 2 年の留学生経験者まで

(3) テキストの形態素分析ができる無料検索ソフトウエア

http://khc.sourceforge.net/index.html

(4) 山内(2009)では各レベルの標識を「アンモナイト形態素」と呼んでいる。

(5) 談話の中で発話意図や発話の方向性、一貫性、結束性を持たせるため、接続詞や標識が使われる。そのような、明示的な標識を談話標識(discourse marker)と呼ぶが、拙稿の呼ぶ

標識とは異なることに注意。

(6) 田窪・金水(1997)では「あの」は「話し手は聞き手に向けての適切な表現形式(モノの名前も含む)」の検索／作成に入っているときに用いられる。「えーと」は「話し手が知識の検索或いは知識を用いた演算に入る時、あるいは、既に入っている時に用いられる」としている。

(7) 「なんか」の使用は年齢差、性差がはっきりしているようである。若い女性の使用が顕著である報告(エメット 2001)がある。今回調査した 30 名のほとんどが 20 代の女性である。また、子供の発話の中にも「なんか」が多く見られるが、上記の機能で説明できるのかは疑問である。

(8) 「ま」に関する先行研究には川上(1993, 1994)、加藤(1999)、富樫(2002)、川田(2006)などが挙げられる。

(9) 終助詞で出現回数が一番高いのは「ね」であった。初級が 14 回、中級が 56 回、そして、上級が 118 回。「よね」は初級が 0 回、中級 3 回、上級が 6 回のみである。

(10) 「思う」は「思うんです」という形式で使われ出すのは超級に入ってから(山内 2009)という。それは「思います」と「思うんです」使い分けができるからだと述べられている。

(11) 「思っている」の誤用については市川(2005)が詳しい。

参考文献

伊佐早敦子(1953)「はなしことば序ー不整表現を中心としてー」『国語国文』第 22 巻 3 号、pp. 49-67

市川保子(2005)「誤用研究と日本語教育」松岡弘・五味政信編『開かれた日本語教育の扉』、スリーエーネットワーク、pp.109-121

エメット啓子(2001)「『なんか』-会話の積極的参加を促すインターアクショナルマーカー-」南雅彦・アラム佐々木幸子供編『言語学と日本語教育Ⅱ』、くろしお出版、pp.201-217

加藤豊二(1999)「談話標識「まあ」についての一考察」『日本語学・日本語教育論集』6 号、名古屋学院大学留学生別科

川上恭子(1992)「談話における『なにか』について」『園田国文』13 号

川上恭子(1993)「談話における『まあ』の用法と機能(1)-応答型用法の分類-」『園田国文』14 号、pp.69-79

川上恭子(1994)「談話における『まあ』の用法と機能(2)-展開型用法の分類-」『園田国文』15 号、pp.69-79

川上良(2010)「『ません』形から『ないです』形へのシフトに関わる要因について」『日本語教育』144 号、pp.121-132

川田拓也(2006)「スケールに作用する表現としての『まあ』」『日本語語用論第 9 回大会予稿集』、

日本語用論学会、pp.50
小林ミナ(2005)「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、pp.23-42
小林ミナ(2005)「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125 号、pp.9-17
田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』、音声文法研究会編くろしお出版、pp.257-279
土岐哲・江崎哲也・岡田祥平(2009)「「非母語話者における日本語話し言葉コーパス」の可能性」『日本語教育』142 号、pp.14-24
野田春美(2002)「終助詞の機能」『モダリティー新日本語文法選書 4ー』、くろしお出版、pp. 261-288
牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤眞理子・萩原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001)『ACTFL OPI 入門-日本語学習者の「話す力」を客観的に測るー』、アルク
水野吉徳(2009)「タイ人初中級話者の『Ｎ１のＮ２－発話時に見られる誤用『Ｎ２のＮ１』を中心にー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 6 号、pp.77-86
森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』、くろしお出版、pp.55-120
山内博之(2005)「話すための日本語教育」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、pp.147-166
山内博之(2009)『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』、ひつじ書房
Ｊ・Ｖネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』、大修館書店